なごや
にんちしょう NEWS
H27.10 月号

発行：
名古屋市認知症相談支援センター
n-renkei@nagoya-shakyo.or.jp
☎052-919-6622

名古屋市
認知症コールセンター ☎052-919-6633
受付時間 月・水・木・金…10～16時
火…14～20時 （年末年始・祝日除く）

名古屋市認知症コールセンター実績報告

1日あたりの平均相談件数	H27 年 6.7 月	H27 年 8.9 月	昨年度同期（8.9 月）
	5.5 件	**6.4 件**	5.7 件

地域での実践より… 本人が語るとき ～ 守山区 認知症専門部会 丹野智文さん講演会 ～

支えてくれるところがたくさんあるとわかったから

39 歳でアルツハイマー型認知症と診断され、以降も職場での理解を得て働き続けながら講演活動をおこなっている丹野智文さん（41 歳）による講演が 10 月 7 日に守山区で行われました。（写真）

丹野さんは「アルツハイマー型認知症」という診断を受けて、必死で情報を収集するものの、**「“アルツハイマーイコール人生終わり…”と思った」。「悪い情報ばかり目についた。“早期絶望”だった」。** と、語りました。

しかし、その後「パートナー」と呼べるひとびとと出会い、前向きな生き方の姿勢を丹野さんは獲得していきました。

「病気をオープンにしよう、支えてくれるところがたくさんあるとわかったから」。
「でも、葛藤もありました。偏見がまだまだあるから」。

パートナー ――― 丹野さんは周囲のひとびとをそう呼びます。「支援者」も含めて、「サポーター」でなく「パートナー」と。

本人が自身の病気について語るということ

丹野さんのように認知症のひと本人が、公の場で自身について語ることが増えています。

> **認知症の人が生き生きと活動している姿は、認知症に関する社会の見方を変えるきっかけともなり…**
> 新オレンジプラン（認知症施策推進総合戦略）2015 年

「本人が語る」とき、接したことのないひとにとっては、病に対する誤解や偏った捉え方を変えてくれる、大きな力になることでしょう。

一方、普段接している「支援者」の受け止め方は様々かもしれません。

> **「しかし、彼女は認知症の人としては信ぴょう性にかけますな」…彼は疑っていたのだ。…私は打ちのめされたように感じた。**
> 「私は私になっていく～認知症とダンスを～」クリスティーン・ブライデン　クリエイツかもがわ 2012 年

たとえ本人が語っても、普段接している認知症のひととは別の **“あくまで例外的な特別なひと”**と、捉えるひとが出現する場面が書籍などでは少なからずみられます。

講演や本という形ではなくとも

> **かつて、私たちは認知症を何も分からなくなる病気と考え、徘徊や大声を出すなどの症状だけに目を向け、認知症の人の訴えを理解しようとするどころか、多くの場合、認知症の人を疎んじたり、拘束するなど、不当な扱いをしてきた。**
> オレンジプラン（今後の認知症施策の方向性について）2012 年

認知症のひとの中には、状況を理解し、想いを言葉でうまく伝えられないひとがいます。しかし、うまく言葉で説明できなくても、病が進行しても、重度のひとも ――― 講演や本などという形ではなくとも ――― その形は様々かもしれませんが、決して、「何も分からない」わけではなく、本人は常に「訴え」ています。

それを、周囲が「分からないひと」と決めつけて接し続けることで、「病識がない」「分からない」ようにみえることもあるかもしれません。

「できないと決めつけないでください」

目にみえない不便。それに留まらず、それがなかなか周囲に理解されないことによる、生きづらさがあること。それはどんな認知症のひとも同じだと思います。

講演する丹野さん（守山区地域包括ケア推進会議認知症専門部会）

「環境次第で笑って過ごせます」

丹野さんらは、自身のことだけでなく、届かぬことがある多くの「訴え」を代弁して語っているようにみえます。